

「私のイチバンボシ」
第6話

水瀬真理佳

○宮本家・えまの部屋（夜）

えま「うーん：：」

えま、腕を組んでローテーブルに並んだうちわを見つめる。

うちわにはそれぞれ「はるピー」「投

げちゅーして」「幸せをありがとう」

の文字。

他にもユニクラウンのツアーグッズの

ペンライトや陽斗の写真のうちわが入

っている。

時計の針は0..30を指している。

1

○同・リビングダイニング（朝）

えま、制服を着てバタバタしながらダ

イニングに入っってくる。

えま「やばい！寝坊した！」

テーブルの上にはトースト、フルーツ、サラダが並んでいる。

美香「昨日遅かったの？」

美香、目玉焼きのお皿を二つ持っ

まの前に座る。

えま「うちわ作ってたら遅くなっちゃった！」

美香「うちわもいいけど、勉強大丈夫なの？」

試験近いでしょ」

えま「らいひよぶらいひよぶ」

と、口の中に詰めこみながら答える。

美香、怪しむ目で見る。

美香「あんまり点数悪かったらライブもバイ

トも考えるからね」

えま「ん!？」

えま、口いっぱいに詰め込んだまま固

まる。

美香「ちゃんと勉強しなさいよ」

と、キッチンにお皿を下げに行く。

えま、口の中身をゴクリと飲み込む。

○事務所・レッスン室

ユニクラウン、鏡の前でダンスの振り

を確認する。

柊也、スタッフと進行表を見ながら打

ち合わせ。

悠真「そういえば、もちろんえまちゃんもラ
イブ来るんだよね？」

陽斗「うん、多分」

悠真「関係者席だから見つけやすいね」

翼「陽斗、ちゃんとファンサしてやれよー？」

凜太郎「俺も見つけたら手振ろーっと！」

陽斗「あーそっか。関係者席ならすぐ分かる

な」

柊也「ごめんみんな。ちょっと相談なんだけ
ど！」

メンバー、立ち上がって柊也の周りに

集まる。

× × ×

ユニクラウン、帰り支度をする。

佐藤、陽斗に近づく。

佐藤「陽斗さんお疲れ様です」

陽斗「おーお疲れ」

佐藤「前の家に似てる感じの部屋でいくつか
物件ピックアップして送ったので、時間あ

る時見てください」

陽斗「マジ助かるわ。ありがとう」

翼「ふざけながら）うえー！ 陽斗もとうと

う一人暮らし始めんの？」

陽斗「とうとうって、元々一人暮らししてた

から」

悠真「このまま社長の家に住むのかと思って

た」

陽斗「そんなわけないじゃん」

凛太郎「でも寂しくなるね？」

と、ニヤけながら陽斗の頬を指でツン

ツンする。

陽斗「なんだよ」

と、手を払う。

陽斗、スマホで物件情報に目を通す。

○宮本家・えまの部屋（夜）

えま、イヤホンで音楽を聴きながら机
で勉強をしている。

スマホの時刻は21…00。

スマホで曲順を操作したついでにSNS

Sを開く。勉強の手が止まる。

× × ×

えま、机に肘をついてSNSを見てい

る。

時刻は21..30。

えま「ダメダメ！」

と、スマホの画面を下にして机に置き

勉強に戻る。

× × ×

集中して勉強するえまの横顔。

えま「ふう」

と、スマホの画面を見る。時刻は22..

30。

えま、伸びをしながら顔を上げると、

机や壁に陽斗のブロマイドやアクスタ

が飾ってある。

ニコッと笑って配置を変え始める。

× × ×

えま、立ち上がって棚のCDやDVD、

雑誌の整理を始める。

えま「懐かしー！」

と、雑誌をめくって読み始める。

× × ×

えま、雑誌から顔を上げてスマホを確

認する。時刻は23..00。

えま「もうダメだ！ ここには誘惑が多すぎ

る！」

えま、スマホと勉強道具を持って部屋

を出る。

○ 同・リビングダイニング（夜）

部屋には誰もいない。

カーリーがケージの中で寝ている。

えま、ダイニングテーブルに勉強道具

を置き、リビングのローテーブルにス

マホを置く。

えま「この距離なら Bluetooth ギリ届くよね」

えま、勉強を再開する。

○同・玄関（夜）

陽斗、鍵を開けて帰って来る。

陽斗「（小声で）ただいま……」

と、靴を脱いで上がる。

○同・リビングダイニング（夜）

陽斗、ダイニングへ行くとテーブルで

真剣に勉強しているえまの姿。

陽斗「ただいま……」

えま「……」

えま、陽斗に気づかない。

○同・キッチン（夜）

陽斗、冷蔵庫からお茶を出す。

食器棚からコップ二つと取り出してお

茶を入れる。

○同・リビングダイニング（夜）

陽斗、コップを二つ持ってえまの前に

座る。

えま、顔を上げてイヤホンを外す。

えま「あ！ おかえりなさい。お疲れ様です」

陽斗「ただいま。ごめん集中してたのにお

茶飲む？」

えま、頷く。

陽斗、えまにコップを渡す。

えま「ありがとうございます」

と、お茶を飲む。

陽斗「えまがここで勉強するの珍しいね」

えま「自分の部屋でやってたんですけど、あ

っちは誘惑が多すぎて……」

陽斗「なるほど」

と、えまを見ながらお茶を飲む。

えま、視線が気になって目が泳ぐ。

陽斗、机の上に置かれたイヤホンを見

て、

陽斗「何聴いてたの？」

と、えまが外したイヤホンに手を伸ば

して自分の耳に入れる。

えま「あ！」

と、手を伸ばす。

陽斗「お、hello worldじゃん。

いいね」

と、リズムを取りながら口ずさみ始める。

えまも陽斗を見てリズムに合わせて横揺れする。

えま「東京ドームライブ。楽しみだなあ」

と、天井を見上げる。

陽斗「今日みんなで『関係者席だからえまのことすぐ分かるね』って話してたんだ」

えま「え？私、関係者席じゃないですよ？」

陽斗「え？」

えま「自名義でしっかり当てたので！」

陽斗「なんで!? 関係者席でいいじゃん！」

さすがにドームで『えまをさがせ』は激ムズだよ。お客さん三万人だもん」

えま「だってえ、関係者席じゃはしゃげないし。ファンとして、やっぱり自分で当てた

チケットで行きたいんです！」

陽斗「ええ：：じゃあ、なんとしても三万人の中から見つけるよ」

と、えまの方に小指を差し出す。

えま「（嬉しそうに）指切りしちゃって大丈夫ですか？」

陽斗「うん。なんかいける気がする」

えま、フツツと笑って小指を絡める。

陽斗「ねえ、どこらへんかだけヒント欲し

い！上手側とか」

えま「んゝ。わりと前の方です！」

陽斗「わりとって何!？」

えま「ふふっ」

と、笑う。

○高校・教室の中

テスト中のクラス。

谷口「よーし時間だぞ。もうペン置けよー。

粘っても大して点数は変わらないんだから、諦めろー」

担任・谷口和馬（36）が教卓に立って

クラスに呼びかける。

生徒がざわめく。

男子1 「谷先ひど！　それが可愛い生徒にか

ける言葉かよー」

女子1 「覚えたところ全然でなかったんだけ

ど

女子2 「私絶対赤点だぁ」

谷口、教室を回りながらテスト用紙を

回収する。

桃香、離れた席のえまに口パクとジェ

スチャーをする。

桃香「口パクで」えまどうだった？」

えま「口パクで」セーーフ！」

と、腕を横に広げて見せる。

桃香、指でグッドマークをつくる。

えま、やりきった顔で黒板横の掲示板

に貼ってあるカレンダーを見る。

10月のカレンダーには「3日　谷先の

結婚記念日」【7日　美和子BD】

【13日　サッカー部大会】【15日　試

験びえん】「20日 ユニクラウン東京
ドーム♡」と書き込まれている。

○ミラベル・店内（夜）

えまと桃香、座ってドリンクを飲む。

えま「試験お疲れ〜」

桃香「かんばしい！」

えま、ニヤニヤしながらドリンクを飲
む。

桃香「顔、溶けそうなくらい緩んでるよ」

えま、頬を押さえる。

えま「え〜だってしょうがないよお。忌々し
いテストも終わって、もうすぐ待ちに待っ
たドーム公演なんだもん！」

えま、喜びを噛みしめる。

桃香「今回いい席だったんだもんね。田中さ
んにちゃんと聞いた？ 私ここにいますよ
〜って」

えま「言っていない！ けど、見つけるって言
ってくれた」

桃香「何それー！ー！今すっごいキュンと
したんだけど！いつの間にかどんどん距
離縮まってるねえお二人さん」

桃香、ニヤニヤする。

えま「ニヤけながら）そんなことはないよお」

綾乃「なにいく？今彼氏の話してたでし

よ？」

綾乃、ケーキを運んでくる。

えま「先輩！」

桃香「こんばんはー！」

綾乃「ねえ、えま絶対彼氏の話してたんでし

よ？」

綾乃、桃香に聞く。

桃香「彼氏：：ではないですね」

綾乃「え、ほんとかなあ」

桃香「ニヤけながら）彼氏：：になっちゃう

かもしれないですけど！」

綾乃「その話詳しく！」

えま「ちよっと桃香！」

えま、慌てる。

綾乃、えまをじーっと見つめる。

えま「先輩、大丈夫ですから！ 私はほら、

陽斗くん一筋ですから！」

えま、スマホで陽斗の写真を見せる。

綾乃「でもその人はアイドルでしょ？ じゃ

あもし彼みたいなのが突然現れたらどうす

る？ 好きになっちゃうんじゃない？」

桃香「そうですねえ」

と、クスクス笑う。

えま「苦笑して」え……いやあ……」

と、何気なく入口の方を見る。

ドアから変装した陽斗が入って来る。

えま、ギョツとする。

○同・レジカウンター（夜）

陽斗、えまを探しながらレジに近づく。

カウンターのいた舞と勇輝、不思議そ

うに陽斗を見る。

舞「お決まりでしたらお伺いします」

陽斗「あっ……」

と、メニューを見る。

陽斗「アメリカン一つ、テイクアウトでお願いします」

舞「アメリカンテイクアウトですね。かしこまりました。400円になります」

陽斗、支払いをしてお渡し口の方へ向かう。

勇輝「アメリカンテイクアウトでお作りしています」

と、カップにコーヒを入れる。えま、待っている陽斗に近づいて肩を

トントンとする。

陽斗、振り返って、

陽斗「あれ。今日シフトじゃなかったんだ」

えま「（小声で）はい。今日は友達と来てて」

えま、桃香の方を見る。

陽斗も桃香の方を見ると、桃香が会釈する。

陽斗も軽く頭を下げる。

えま「まだお仕事なんですか？」

陽斗「そう。これからリハあつて」

えま「無理しないでくださいね」

陽斗「うん。ありがとう」

勇輝「お待たせいたしました。テイクアウト

アメリカンです」

と、陽斗にカップを渡す。

陽斗「ありがとうございます」

えま「じゃあ、気を付けて」

陽斗「えまもね」

と、店を出ていく。

えまも席に戻って行く。

綾乃、店を出た陽斗を見ながらカウン

ターに戻って来る。

綾乃「ねえ、今の人って本当にえまの彼氏じ

ゃないの？」

勇輝「さあ？」

綾乃「えまがシフト入ってる時とかたまに来

る人だよね」

勇輝「あーそうだ。なんか見覚えあると思っ

た」

綾乃「絶対彼氏だよ！　ちよっと年上っぽかったから、きっと秘密の交際なんだって！　今度えまに聞いて！」

綾乃、興奮しながら言う。

勇輝「何で俺が。そういうのは女同士の方が絶対話しやすいでしょ」

綾乃「もし本当に彼氏だったら、私には言いにくいかもしれないでしょ？」

勇輝「（ニヤニヤしながら）ああ。先輩まだ彼氏できてないですもんね？」

綾乃「ムカつくけど言い返せないのがさらに悔しい！」

綾乃、勇輝を睨む。

勇輝「でもアイツ、本当に田中陽斗しか見えてない筋金入りのオタクだからなあ。普通の男のこと好きになるの想像つかないかも」

綾乃、えまたちを見る勇輝の横顔を見る。

○同・店内（夜）

桃香「田中さんなんだって？」

えま「今からリハなんだって」

桃香、驚いてスマホの画面で時間を確認する。

桃香「ウソ！この時間からまだ仕事なの!？」

だってもうすぐ20時だよ？」

えま「多分みんなそれぞれ忙しいからメンバーで揃う時間が限られてるんだと思う。こういうの結構普通なの。ドラマとかが重なりと家帰って来るの0時超えることなんてしょっちゅうだし。大変だよね、芸能の人って」

桃香「そうなんだあ……じゃあ疲れて帰って来る田中さんをえまが癒してあげないとね」

えま「い、癒す!？」

○（えまの妄想）宮本家・陽斗の部屋（夜）

陽斗「ああ疲れたあ……」

と、ベッドに横になっている。

えま「癒す………一体何をどうすれば……」

えま、目が泳ぐ。

陽斗「来ないの？」

と、自分の隣をトントンとする。

えま、ゴクリと喉を鳴らして陽斗の隣に横になる。

えま「失礼します……」

陽斗、えまを後ろから抱きしめる。

陽斗「あゝ癒される。やっぱりえまを抱き枕にしないと疲れとれないわ。このまま寝れる」

えま、真っ赤な顔を手で覆い隠しながら、

えま「私は一晩寝れそうにありません」と、呟く。

○ミラベル・店内（夜）

えま、顔を真っ赤にして一点を見つめて

桃香「ヤダ、えまったら！　どんなこと想像したわけえ？」

えま「別に！ 私が陽斗くんの抱き枕とか、
そんなの全然考えてないから！」

と、慌ててドリンクを飲む。

桃香「言っちゃってるし」

と、笑う。

○宮本家・えまの部屋（夜）

えま、机に向かってノートにアイデア
を書く。ノートには「食べ物差し入れ」
【癒しグッズプレゼント】と書かれて
いる。

えま「癒し：癒し：私にできる癒しとは
：：」

と、口を尖らせる。

えま、煮詰まってノートに落書きを始
める。クマらしき独特な動物の絵。

えま「別に癒しにはならないかもしれない
けど：：」

と、何か閃いた顔。

えま、メモを取り出して何かを書き始

める。

○同・陽斗の部屋の前（深夜）

陽斗、部屋の前まで歩いてくる。
ドアにメモが貼ってある。テープを剥
がして読む。

「お疲れ様です！もうすぐ東京ド
ムですね。絶対に私だって分かるうち
わを作ったので、見つけてもらえると
嬉しいですよ。どうか無事にツアー完
走
できますように。おやすみなさい」
メッセーজの最後にはクマもどきの独
特な動物の絵が描かれている。
陽斗、フツと笑う。

陽斗「お前、あの時の！カップに描いてあ
ったクマじゃん」

と、メモに書かれた動物を優しくなぞ
る。

陽斗、えまの部屋を見る。

陽斗「任せとけ」

と、えまの部屋に向かって拳を突き出す。

○ 同・えまの部屋（深夜）

ベッドですやすや眠るえま。

○ 同・えまの部屋

テーブルの上にはメイクポーチから溢れたメイク道具や鏡。

えま、ラグに座り鏡を見ながらカラーコンタクトを入れる。

そして慎重にマスカラを塗る。

部屋の外から美香の声。

美香の声「えまー！ そろそろ行くわよー」

えま「はい！」

えま、ドアに向かって叫ぶ。

リップを塗ってニコッと笑う。

○ 東京ドーム・外観

物販のテントと長蛇の列。

あちこちでグッズを持って写真を撮る
ファンの姿。

○同・控え室

長テーブルに並ぶケータリング。
部屋の中のミラーの前にはメイク道具
が散乱。
衣装ラックが壁に寄せられている。
スタッフが慌ただしく行き交う。
柗也、ストレッチをしている。
悠真と翼、エナジードリンクで乾杯し
て一気飲みしている。
凜太郎、イヤホンで音楽を聴きながら
振りの確認。
陽斗、鏡の前でメイクさんにメイクを
直してもらっている。
スタッフがドアの所にくる。
スタッフ「スタンバイお願いします！」
ユニクラウン、バラバラに返事。
柗也「よし！みんな集まって！」

柗也の周りにメンバーが集まる。

柗也「ツアーファイナル！ぶちかまそう

ぜ！いくぞユニクラウン！」

他のメンバー「っしゅあ！」

メンバー、部屋を出ていく。

○同・会場内

えまと美香、会場前方のアリーナ席に座る。

美香「すごい近いね！」

えま「でしょ？ママが強運に産んでくれ

たおかげだよ！」

美香「でも友達と来なくて本当に良かった

の？」

えま「だって私オタ友ほとんどいないんだも

ん。ママも知ってるでしょ？」

美香「でも前クラスに陽斗くん好きな子がいるって言ってなかった？」

えま、周りを気にしながら、

えま「小さい声で）その子はね、同担拒否っ

て言っ、簡単に言うと推しが被ってる人
とは関わりたくないタイプの子なの」

美香「色々複雑なのねえ」

と、頷く。

えま「そう！オタクの世界は大変なの」

美香「そうだ。終わったら楽屋挨拶行くから

ね。パパが来れないから代わりに」

えま「：：えっ!? 楽屋!? だからそういう

大事なことはもっと早く：：！」

挙動不審のえま。

会場の照明が暗くなり音楽が鳴り始め

る。

えま、ステージの方を見る。

ステージにプロジェクションマッピン

グが映し出され、ユニクラウンが現れ

る。

観客「キャー！ー！ーッ！」

甲高い歓声が響き渡りライブが始まる。

えまもペンライトとうちわを握ってス

テージに釘付け。

ユニクラウン、歌いながらキレキレのダンスを披露。

× × ×

陽斗、歌いながらえまの方に向かって歩いてくる。

えま「陽斗くんのだ！」

えま、陽斗に向かってうちわを振る。陽斗、観客を見ながら手を振る。

陽斗「いた！」

と、うちわを持ったえまを見つける。うちわには「えまを探せ大成功！」と書かれている。

陽斗「口パクで」見つけた」

と、えまの方を指差してニコッと笑う。

美香「陽斗くん！」

と、えまにジェスチャー。えま、嬉しそうに頷いてペンライトを振る。

× × ×

凛太郎が歌いながら歩いてくる。えま

に気づいて手を振る。

えま「凜くん！」

えま、凜太郎に手を振り返す。

× × ×

ステージに横並びになるユニクラウン。

陽斗「よくみんなで、『いつかドーム公演し

たいね』って話してました。でもまだデビ

ューもしていないかったあの頃の俺らにとっ

て、それは夢のまた夢の話でした」

凜太郎「でも今こうして一つずつ本当に夢が

叶っているのは、ファンの皆さんの応援が

あったからです」

翼「いつも本当にありがとう！」

悠真「これからもでっかい夢掲げて突き進ん

で行くんで、ついてきてくれると嬉しいで

す」

陽斗「ていうか絶対ついてこい！」

歓声上がる。

柊也「今日は俺らに最高の景色を見せてくれ

てありがとう！そしてこれからよろし

くな！」

ユニクラウン、全員で手を繋いでお辞儀。

観客、拍手喝采。

えま、目に涙を浮かべて拍手する。

翼「それじゃあアンコール行くぜー！」

観客の歓声。

音楽が鳴り、歌い始めるユニクラウン。

× × ×

会場が明るくなり退場のアナウンスが流れる。

ファン「やばい！ はるピーにファンサして

もらえた……」

ファン、口元を押さえて感動する。

ファン「見た見た！ 絶対こっちに向かって

バーンってやってたもん！」

えま、隣の女子二人をチラッと見る。

女子の手には「決めポーズして」と書

かれたうちわ。

美香「陽斗くんと凜くん、気付いてくれてた

ね」

と、えまに耳打ちする。

えま「嬉しそうに」うん！」

○同・関係者エリア（夜）

美香とえま、スタッフに連れられてスタッフが行き交う廊下を進む。

スタッフたち「お疲れ様です」

スタッフが美香たちに挨拶する。

美香「お疲れ様です」

えま「お疲れ様です」

ユニクラウンの控室の前で止まりドアをノックする。

スタッフ「社長の奥様とお嬢さんがいらっしゃいました」

えま、ゴクリと唾を飲みこむ。

スタッフ、ドアを開ける。
ユニクラウン、全員立ってお辞儀する。

ユニクラウン「お疲れ様です！」

美香「お疲れ様ー！ ライブすごく良かった

たよ！」

えま、美香の後ろから顔を覗かせる。

えま「お疲れ様です！」

翼「えまちゃん！」

凜太郎「えまちゃん俺が手振ったの見た？」

えま「はい見えました！　ありがとうございます！」

ました！」

悠真「ウソ！　俺も探したんだけど全然見つ

けれなかった」

凜太郎「アリーナにいたよね？　結構前の方」

えま「はい！」

悠真「関係者席じゃなかったんだ!?」

柊也「陽斗は知ってたの？」

陽斗「：：関係者席じゃないって言うのは聞

いてたけど、まさかアリーナだとは思わな

かった」

翼「お前、知ってたなら教えとけよ！」

と、陽斗の頭をぐりぐりする。

えま「すみません！　私が秘密にしてたんで

す！」

悠真「いや、はるピー絶対わざとだから。え
まちゃんのせいじゃないよ」

と、えまに耳打ちしてウインクする。
えま「わざと？」

悠真、ニコニコしたまま。

ドアをノックする音と同時にドアが開
いて√A（ルートエー）のメンバー、
森直哉（28）、小野寺遼（28）、金原夏樹
（23）、瀬名大和（26）が入って来る。

直哉「おつかれーっす」

柊也「おー！ お疲れっす」

陽斗以外、ルートエーの方へ行く。

陽斗、えまに近づく。

陽斗「見つけたって言ったの分かった？」

えま「もちろんです！ どうでしたか？ あ

のうちわ！」

陽斗「あんなうちわ初めて見たよ」

えま「やったー！ 今回は三万分の一、唯一
無二を目指したんです」

陽斗とえま、二人で笑い合う。

大和の声「あれ？　もしかしてえまちゃん？」

えま「うそ……ルトエーの方を見る。」

えま「うそ……ルトエーの大きくんだ……」

と、口元を手で覆う。

陽斗「大和」

大和、えまたちに近づく。

大和「やっぱりそうだ！　ねえ、俺のこと覚

えてない？」

えま「覚えてるも何も……（興奮して）ルー

トエーの瀬名大和さん、ですよね？　もち

ろん存じ上げております！」

陽斗、おもしろくなさそうな顔。

大和「まあ間違いではないけど……今のだと

三十点かなあ」

えま「えつと……え？」

大和「ほら、覚えてない？　昔事務所のパー

テイーと一緒に遊んだの。えまちゃんは確

か小学校低学年くらいだったかなあ」

えま、真剣に思い出す。

えま「ああっ！　もしかして、あの時の大

和くん!?

大和「そう！あの時の大和くんだよ！や
っと思い出してくれたー」

えま「どうしよう：：こんなことってありま
すか!？」

えまと大和、盛り上がる。

陽斗「つまんなさそうに：：なに、二人は
知り合いなの？」

大和「俺らが高校上がったくらいだったか
な？事務所のパーティーにえまちゃんも
来てて、まだ小学生だったから俺と夏樹で
一緒に遊んでたんだ」

えま「そうなんです！でもまさか、あの時
の大和くと夏樹くんが、ルートエーの大
くんとなくなっくんなんて気づかなかっただ
す！」

大和「それはちょっとショックだわあ。あの
時は『やまとくん』って俺の手握って離さ
なかつたくせに」

えま、頬を赤くして慌てる。

えま「ちょっと！　もうそんな大昔のことは
忘れてください！」

陽斗、二人のやりとりを黙って見つめ
る。

大和「逆にさ、二人は何繋がりなの？」

えま「えっと……（陽斗の方を見る）」

陽斗「今一緒に住んでる」

と、大和を真っすぐ見て言う。

大和「え？」

えま「えっ!？」

えま、陽斗の方を見る。

陽斗、何食わぬ顔。

えま、慌てながら、

えま「ちょっと事情があつて。パパが急に連

れてきて、しばらくうちに住むことになっ

たんです。はい」

大和「へえ……：：そうなんだ！」

と、陽斗を見つめる。

悠真の声「はるピー！　早く衣装脱げって！」

陽斗「わかった！」

大和「じゃあ俺もそろそろ帰るわ。陽斗、今日はお疲れ様！ライブ良かったよ。また飲みいこーぜ」

と、陽斗の肩をトントンとする。

えま「私も帰ります！お疲れ様でした！」

陽斗「うん、ありがと：：」

えまと大和、部屋を出ていく。

○同・廊下（夜）

廊下には美香とルートエーのメンバーがいる。

大和「俺らこれからマネージャーたちとご飯行くんだけど、えまちゃんも来ない？」

えま「そんなんっ！私なんかがルートエーの皆さんとお食事なんて恐れ多すぎます！」

大和「（わざとらしく）あー俺えまちゃんに忘れられてて傷ついたのになあ。でももしえまちゃんが来てくれれば、そのこと許そうかなあ」

大和、片目を開けてえまを見る。

えま 「うっ…それは…」

美香 「せっかくだし行って来れば？」

えま 「ちよつとママ！」

大和 「美香さんも一緒にどうですか？」

美香 「私は帰らないとな。ワソコがお留守

番中だから。えまのことお願いしていい？」

大和 「もちろんです！美香さんの許可も出

たことだし、決まりというところで。行こ！」

えま 「それじゃあお言葉に甘えて…」

○高級焼肉店・個室（夜）

えま、ルートエーの四人、マネージャ
ー二人でテーブルを囲む。

大和、えまにタブレットメニューを渡

す。

大和 「はい。食べたいのあったら遠慮なく言
ってね」

えま 「ありがとうございます」

えま、メニューを開く。

直哉 「えまちゃん何飲む？」

えま 「んーと……」

大和 「ここノンアルも結構種類豊富なよ」

えま 「このベリーニ風ってどんなのですか？」

大和 「ベリーニって確か桃？　だっけ？」

夏樹 「そ！　桃の甘いお酒。そのノンアル版

って感じ！　普通に美味しいと思うよ」

えま 「じゃあ私これにします！」

直哉 「うっし！　肉はテキトーにいつもの感

じで。えまちゃん食べたいものとか逆に食

べれないものとかある？」

えま 「いえ！　何でも食べれるのでみなさん

にお任せします」

遼 「いま直（ナオ）『うっし』って言った？

牛肉だから？　牛でうっし？　やっぱさす

がだなあ」

と、ふざけ始める。

夏樹 「うわほんとだ！　よく気づいたな！」

と、遼にノる。

直哉 「お前らいつものノリやめろって。えま

ちゃんに引かれるだろ」

と、ニヤけながらタブレットで注文する。

えま「クスクス笑いながら、えま「ルトエーのみなさんって動画だけじゃなくて普段からこんなに面白いんですね」

大和「えまちゃん俺らのチャンネル見てくれるの？」

えま「はい！いつも笑いながら見えます！」

夏樹「それは嬉しいなあ」

遼「ふざけて」じゃあ今日は俺らが奢るんで、好きなだけ食べてください！」

直哉「当たり前だよ！」

と、遼の頭を叩いてツツこむ。

えま、楽しそうに笑う。

大和、えまの横顔を見て微笑む。

× × ×
大和、肉を焼きながら、

大和「えまちゃん今日関係者席いた？俺気

づかなったんだけど」

えま「私ファンクラブ入ってるので、関係者

席じゃなくて、自分で当てた席で見ました！」

直哉「自分で当てたの？　すげーな。倍率エグいでしょ？」

えま「はい。年々エグくなってますね」

大和「まさかのユニ担だったんだ」

えま、照れ臭そうに頷く。

夏樹「でもそしたら関係者席の方が良くな

い？　ユニクラとほぼ確実に目合うよ」

えま「ここはオタクとして絶対自分で掴んだチケットで参戦したくて！」

遼「超健気じゃん！　ちなみに誰担なの？」

えま「田中担です！」

大和「ほお」

直哉「はるピーなあ。あいつカッコいいもんかな」

夏樹「ねえ！　じゃあさ、ルトエーだったら誰推し？」

えま「：：やっぱり、大和くんですかね？」

大和「よっっし！」

と、ガッツポーズする。

直哉「ズリーよ。だって大和はえまちゃんと知り合いだっただろ？　それはフェアじゃねーって」

大和「それを言うなら、夏樹も一緒に遊んでたけどな」

遼「笑いながら」選ばれなかった男……」
夏樹、シヨックを受けたフリをする。

えま「慌てて」いえ！　そういうことじゃなくって！」

夏樹「じゃあ、俺と大和だったらどっち？」
えま「それなら……」

夏樹、満面の笑みで「俺、俺！」と自分を指さす。

えま「ニヤけながら」やっぱり大和くんです！」

大和、ドヤ顔で静かに手を挙げる。

夏樹「おいー！」

と、わざとがっかりする。

遼、手を叩きながら笑う。

直哉「えまちゃん超バラエティーできるじゃん」

一同、盛り上がる。

○同・店の外（夜）

マネ1「じゃあ私はえまちゃん送るから」

大和「俺も方向一緒だから乗る」

マネ2「じゃあ他は俺が送って行くよ」

直哉「じゃーねえまちゃん！」

夏樹「お酒飲めるようになったら一緒に飲もうな！」

遼「バイバイ！」

えま「はいぜひ！ありがとうございます！
た！ごちそうさまです！」

えま、手を振る。

マネ1「私たちも帰ろっか。駐車場すぐそこだから！」

えまと大和、マネ1について行く。

○駐車場（夜）

コインパーキングに停まっている黒い車。

マネ1 「二人とも後ろ乗っちゃってー」

大和、後部座席のドアを開ける。

大和 「ほい！ えまちゃんどーぞ」

えま 「ありがとうございます」

と、乗り込む。

大和も乗り込んで車が発進する。

○道路・車内（夜）

窓の外に東京の夜景が流れる。

えまと大和、真ん中を開けて座る。

大和 「今日急に誘っちゃってごめんね」

えま 「いえ！ すごく楽しかったです！」

大和 「でもまさかユニクラウンのライブで再

会できるなんて夢にも思わなかったよ」

マネ1 「小学生以来ってことは、十年ぶりくらいなの？」

マネ1、フロントミラー越しに話しかける。

えま「多分あの時七歳とかそれくらいだったからそうですね。ちょうど十年ぶりくらいです！」

大和「そして十年ぶりに会ったらまさかのユニ担だし。今日のライブはどうだった？」

えま「もう最っっ高でした！ライブ行きたびに『ユニクラウンって本当に存在してたんだ』って感動しちゃいます。いつもたくさん元気をもらえて、やっぱりアイドルってすごいですね！」

えま、目を輝かせながら語る。
大和「本当にユニクラ大好きなんだね」

えま、自信満々に、
えま「はいッ！」

○宮本家・車寄せ・車内（夜）

車が建物の前に停まる。

マネ1「とうちゃーく！」

えま「送ってくださってありがとうございます
しました！」

えま、シートベルトを外す。

マネ 1 「いいのいいの！ 私も上まで行こうか？」

えま 「いえ！ 母にも連絡してるので大丈夫です。大和くんもマネさんも気をつけて帰ってください！」

大和 「今度俺らのライブも来てよ。ユニクラに負けないくらい楽しいから！ はい、約

束！」

大和、えまに小指を差し出す。

えま 「はい！ 絶対行きます！」

えま、小指を絡める。

大和、ニコッと笑う。

えまが車を降りると助手席と後部座席

の窓が開く。

えま、手を振りながら、

えま 「おやすみなさい！」

大和 「おやすみ！」

マネ 1 「美香さんによろしく伝えてね」

車が発進する。

○同・玄関（夜）

えま、ドアを開けて帰って来る。

えま「ただいまー！」

と、靴を脱ぐ。

カーリーが吠えながら走って来る。

美香「おかえりー！ 楽しかった？」

美香も玄関に来る。

えま「うん！ すごい楽しかった！」

美香「良かったね」

○同・リビングダイニング（夜）

えま、カーリーを抱っこして美香とリビングへ入って来る。

美香「どうだった？ 楽しかった？」

えま「うん。超楽しかった！ ルトエーのみ

んな、ほんと動画と同じノリで。仲良いし、

面白いし！」

美香「良かったわね」

と、微笑む。

えま「でもあの時遊んでくれてた大和くんと

夏樹くんがルトエーだったなんてビックリだよ。気づかなかったなあ、というよりまさかそうだとは思ひもしなかった！」

えま、カーリーをケージに入れる。

美香「：：もしかしたら意外と、えまがあの頃会ってた人が他にもいるかもよ？」

えま「確かに！だとしたらすごいねえ」

えま、両手で頬を押さえる。

えま「私、お風呂入って来るね。すごい焼肉の匂いする」

と、服の匂いを嗅ぎながら浴室へ向かう。

美香、えまの背中を見送りながら、美香「まあ、覚えてないのも無理ないか」

○（美香の回想）ホテル・パーティー会場外絨毯の広間。

えま（7）、よそゆきのワンピース姿で走る。

えま「ママー！　待ってー！」

えま、男子三人とすれ違う。

えまの髪についていたリボンがひらりと落ちる。

一番後ろを歩いていた陽斗（16）、落ちたりボンを拾う。

陽斗「待って！」

と、えまを呼び止める。

えま、立ち止まって陽斗の方を振り返る。

えま「？」

陽斗、えまに近づいてしゃがむ。

陽斗「：：これ、落ちたよ」

と、えまにリボンを差し出す。

えま「：：せっかくママが可愛くしてくれたのに、とれちゃった：：」

えま、悲しそうな顔をする。

陽斗「：：俺がつけよっか？」

えま、コクりと頷く。

陽斗、えまのポニーテールのゴムにリボンを結ぶ。

陽斗「はい、できた」

えま「ありがとうお兄ちゃん！」

えま、ニコツと笑う。

陽斗「どういたしまして」

と、笑顔になる。

翼の声「おい陽斗！置いてくぞ」

美香の声「えまー！」

えまと陽斗、それぞれを呼ぶ声に反応

する。

えま「お兄ちゃんバイバイ！」

陽斗「バイバイ」

えまと陽斗、反対方向に走って行く。

× × ×

美香、陽斗の後ろ姿を見つめる。

えま「ママー！」

と、走って来て美香の手を握る。

美香「あのお兄ちゃんにつけてもらったの？」

えま「うん！」

えまと美香、歩き出す。

○（美香の回想）宮本家・リビングダイニング
グ（朝）

美香、ソファに座って朝のニュース番組
組を見ている。

アナウンサー「今朝四時解禁。ユニクラウン
のデビューシングルhelloworld
dのミュージックビデオが解禁されました」
ミュージックビデオが流れる。
メンバーのアーティスト写真が表示さ
れる。

美香、陽斗を見て、

美香「あれ、この子！あの時の……！」

美香、にっこり笑って立ち上がる。

（了）